

## 英語の二重目的語構造における直接目的語 省略可能性について

吉 田 正 治

### 1

Eat, drink のような *unspecified object* を取り得る他動詞を除き, 一般に他動詞が直接目的語を要求することはつぎに示す通りである。

- 1) a John murdered the girl.  
b \*John murdered.
- 2) a John enjoyed the party.  
b \*John enjoyed.

この観点から, いわゆる二重目的語を取る動詞群を再検討してみると, 直接目的語省略可能性に関してかなり興味深い統語的事実があることがわかる。そこでこの小論では, 上の事実は単に統語的性質を表わしているのではなく, 深く意味論とかかわりあっていることを明らかにし, つぎに *write* という, この観点から眺めると特異な動詞に関して, アメリカ語法の現状を報告することにした。

二重目的語を取る動詞は, Fillmore (1965) によれば, A) *give, hand, lend, offer, send, show...* のように深層構造に前置詞 *to* を従えるものと, B) *build, buy, choose, get, leave, make...* のように前置詞 *for* を従えるものに大別される<sup>1</sup>。A), B) 両群とも, ともに他動詞であるという性質上目的語を要求することには変わりがないが, 一般の他動詞と異なる点は, 間接目的語は必ずしも必須の要素ではないという点である。

- 3) a John gave a book to his brother.  
b John gave his brother a book.  
c John gave a book.  
d\* John gave to his brother.  
e\* John gave his brother.
- 4) a Tom bought a hat for his sister.  
b Tom bought his sister a hat.

- c Tom bought a hat.
- d \*Tom bought for his sister.
- e \*Tom bought his sister.

とくに、この事実は、B) 群のすべての場合にあてはまり、つぎに示すように直接目的語が省略される可能性が全くない。

- 5) a\* John built (chose, got, left, made, ...) his sister.

これに反して、A) 群の中には、上記の原則に反すると思われる動詞がある。すなわち、pay, teach, tell<sup>3</sup>などは、原則的に、間接目的語のみならず、直接目的語までもいずれか一方残っている限り、省略され得る。

- 6) a We've already paid the bill.
- b We've already paid the salesman.
- 7) a He taught English.
- b He taught small children.
- 8) a She told s thetory.
- b She told her mother.

ここで、当然のことながら、なぜ二重目的語構造を持つ大部分の動詞が、他の他動詞と同様、直接目的語を必須の要素として要求するのに対して、pay, teach, tellなどは、その省略を許すのかという疑問が湧いて来る。3) 4) と 6) 7) 8) を比較して直感的に思い浮かぶ解決案は、A) B) に属する大部分の動詞の場合、直接目的語が省略されると、英語には直接・間接を区別する明白な case marker がないことと、動詞の直後の位置が直接目的語の占める典型的な位置であるために、構造変化を起こし、間接目的語が直接目的語として re-analyze されてしまい、適切な意味解釈が阻害されるため、という考え方である。例えば、(3e) の his brother と (4e) の his sister は、それぞれの文において直接目的語としてしか解釈されない故に、これらの文は非文法的な文になってしまうと考えるのである。もちろん、ジョンが弟を誰かにくれてやったり、トムが誰からか女を金で買い、それを妹にしたという解釈が可能ならば、その意味で、これらの文は容認可能な文となろう。重要な点は、二重目的語構造を従える大部分の動詞は直接目的語が省略されると、残された名詞句は間接目的語の機能を保持できないということである。このことは、つぎのように、

- 9) a We chose him (as our representative).
- b He left her.
- c We saved him.
- d We sent him (to help them).

意味解釈上不自然さが全くない場合、より一層明らかとなり、動詞の直後に来る名詞句が直接目的語として解釈されるという事実には全く議論の余地がないと思われる。

これに反して、6b) 7b) 8b) が認められるということは、*the salesman, small children, her mother* がそれぞれの文において間接目的語の機能を依然として保持している<sup>4</sup>ということの意味する。しかし、単にそれらが間接目的語として機能しているということだけでは先の疑問に答えたことにならない。説明しなければならないのは、なぜ動詞の直後の位置が直接目的語の位置であるのに、これらの名詞句が間接目的語でいられるか、ということである。

これに答えるために、*pay, teach, tell* などの動詞の意味構造を考えると、それが直接目的語の省略可能性に関して、かなり決定的な役割を果していることがわかる。換言すれば、これらの動詞の意味構造は、程度の差こそあれ、直接目的語の意味を包含していると言える。少なくとも、これらの動詞は、*give* や *make* よりも直接目的語として取り得る名詞句の範囲が遙かに狭いということだけは言えそうである。

典型的な例として、*pay* を考えてみよう。この動詞の直接目的語は何らかの意味で金を示すものである。給料であれ、代金であれ、予約金であれ、はたまた借金であれ、罰金であれ、すべて金を表わしていることには変わりがない。従って、話者が支払う金の種類（例えば給料、借金など）を明示する必要を感じずに、支払う相手だけを問題にするときは、直接目的語（すなわち金）は、この動詞の意味構造から自動的に *imply* されるために、いわば *redundant* に感じられ、その結果、省略されるものと考えられる。つまり、筆者は、直接目的語の省略可能性は、このような語い上の意味的余剰性によって決定される、と主張したいのである。

ほぼ同様なことか *teach* や *tell* にも言える<sup>5</sup>。すなわち、これらの動詞の意味構造には、それぞれ *give instruction on, give information about* があり、従ってすでに語い的に直接目的語が含まれているために、いわゆる直接目的語を明示する必要は必ずしもない。7b), 8b) はそれぞれ *instruction* なり、*information* なりを与える対象が *small children* であり、*her mother* であったと主張する文である。もちろん、これらの動詞が表層構造に直接目的語を伴っていてもよい。それは、それぞれ *instruction, information* の内容を明確にする働きをするからである。ちょうど、*pay* が表層の直接目的語を伴う場合に、支払う金の種類を明確にするのと同断である。

この語い上の意味的余剰性という概念は、何にも上記のような動詞の直接目

的語の省略だけを説明するものではない。 Drink, eat, breathe, inhale, exhale, ride, read, write, sew, shave, spit, win...などの動詞が形態論的に同じ形式を有しながら、なぜ自動詞としても他動詞としても使えるかの説明を提供してくれる。例えば eat は、直接目的語として food に相当する語を包含しているために、直接目的語の種類（例えば、肉とか野菜など）を明示する必要がないときは、省略され、自動詞として使われるのである。

このような観点から、pay, teach, tell を眺めてみると、これらの動詞は、すでに述べたようにその意味構造の中に直接目的語を持っているはずだから、それ自体自立できる自動詞的な性格を持たねばならないことになる。事実、つぎのように、これらの動詞には自動詞的な用法が存在する。

- 10) a You have to pay for the damage.  
 b She taught in junior high schools.  
 c You can't always tell with a premature baby.

さて、ここで問題になるのは、read が二重目的語を従えたとき、上記の仮説の反例となるのではないかと思われることである。すでに述べたように read も pay などと同様に直接目的語（すなわち something written, printed etc.）を意味構造の中に持っていると考えられるにもかかわらず<sup>6</sup>、つぎのように、

- 11) a John read the letter to Mary.  
 b John read Mary the letter.  
 c John read the letter.  
 d\* John read Mary.  
 e\* John read to Mary.

直接目的語の省略を許さないからである。しかし、注意したいのは、読むという行為は、読む材料（直接目的語となって現われる）は必要なものの、読んで聞かせる相手は普通必要がないということである。言いかえれば、read は本質的にこの動詞の主語になるものの個人的な行為を表わすと言える。これに対して、pay, teach, tell は、表層構造に現われるかどうかは別にして、常に相手の存在が意識される。つまり、金を支払う相手、何かを教える相手、何かについて情報を与える相手が必要になる。この意味で、これらの動詞は対人的な行為を表わす動詞と言える<sup>7</sup>。それ故、6b), 7b), 8b) が認められるのに、11d) は認められない<sup>8</sup>。

これまで直接目的語が動詞の意味構造の中に含まれる場合、それが省略され得ることを語い上の意味的余剰性によって説明してきた<sup>9</sup>が、文脈<sup>10</sup>によって

明示された場合も、同様な現象が起こるかどうかが検討してみることも興味あることである。一見、上の議論を拡張し採用すれば、文脈によって直接目的語が明らかな場合も、伝えるべき意味情報から考えると、これも **redundant** になるので、省略が可能ではないかという予測が成立するが、つぎに見るように実際はそうではない。

12) A: "To whom did you give the watch?"

B: a\* "I gave Tom."

b\* "I gave to Tom."

c "I gave it to Tom."

13) A: "For whom did you buy a dress?"

B: a\* "I bought my daughter."

b\* "I bought for my daughter."

c "I bought it for my daughter."

上の事実は文脈による意味的余剰性が、英語の二重目的語構造を取る動詞の直接目的語省略可能性に関して何の影響も与えないことを示すものである<sup>11</sup>。もちろん、語い上の意味的余剰性を持つ動詞に関しては、文脈から目的語が明らかな場合も、当然予想されるように、その省略可能性に変わりがない。

14) A: "To whom did you pay the money?"

B: a "I paid Tom."

b "I paid it to Tom."

c\* "I paid-to Tom."

語い上の意味的余剰性と文脈によるそれが統語的な差異になって現われるのは英語特有の統語的特徴のようである<sup>12</sup>。例えば、つぎの日本文

14) a 彼にあげました。

b 彼に教えました。

は文法的に言って全く差異がない。われわれが 14) の文を普通に解釈するとき、話者も聞き手もその目的語が何人であるか知っているという前提に立つ。換言すれば、文脈によって直接目的語を知ることができ、しかも、直接目的語と間接目的語を表わす **case marker** が異なるために、14) のように、例え直接目的語が脱落しても構造変化を起こすことはなく、従って間接目的語はその本来の機能を失うことは決してない。ほぼ同様な現象がロシア語、ペルシャ語、スペイン語、アラビア語、ペルーの土着語の一つであるケチワ語などに見られ、文脈によって直接目的語を補える場合は、**give** 型、**buy** 型、**pay** 型を問わず直接目的語が省略され得るらしい。

ここで興味あることは、文脈による意味的余剰性が直接目的語省略に関係があり、語い上のそれが関係がない、ということは考えられないということである。言いかえると、give 型の直接目的語は省略可能であるが、pay 型のそれは不可能であるような言語は存在しないと言える。なぜなら、pay 型はそれ自身の中に目的語を組み入れているという意味で自立し得る性質を持っているのに対し、give 型は文脈に依存しているという意味で他立せざるを得ないからである。従って、give 型が直接目的語の省略を許すなら、当然 pay 型もそれを許すということになるわけである。現在、筆者の調査した範囲内では、この原則に反すると思われる言語はなさそうである。

## 2

さて、write という動詞は直接目的語省略という観点から見ると実に興味深い。まず、その意味構造から考えると、当然 write は pay 型に属するという予測が成り立つが、事実、つぎに見るように、

- 15) a John wrote her a letter.  
 b John wrote a letter.  
 c John wrote her.  
 d John cannot read and write<sup>13</sup>.

完全に pay 型である。15c) は直接目的語がこの動詞の意味構造の中に組み入れられているために意味的に redundant になり、その結果省略され得ることを示し、またそのために、自動詞的用法も存在することを 15d) が示している。

この動詞の特異な点は、pay 型の動詞が直接目的語が省略されると、前置詞 to を伴えないのに対し、つぎのように、to を保持できることである。

- 16) a John wrote to his mother once a month.  
 b\* John paid to the landlady.  
 c\* John is teaching to children.  
 d\* John told to me.

なぜそうなのか、現在のところ、筆者には納得の行く答えを提供することができない。OED によれば、write to a person の方が歴史的に古い用法で、write a person の用例が多くなるのは 18 世紀の後半からであると言う。そして、特にイギリスでは、この用法は、現在 commercial または colloquial であるということになっている。とすれば、言語の一般化に向う傾向から察して、現在の write to a person, write a person の相拮抗した状態から、やがて to が脱落し、write to a person は write a person に吸収され、pay 型と全

く同じ統語的性質を示すようになるかも知れない。事実、その方向を示唆すると思われる証拠が、わずかながらある。それについては後にまたふれることにする。

ところで、日本の英語教育界において、「～に便りをする」に対する英語の訳語が、**a letter** を使わない場合、殆んど例外なく **write to a person** になっているのはどうしてであろうか。因みに、手許にある大修館の『新スタンダード和英辞典』(1964 版)のような中和英辞典のみならず、研究社の最近改定された『新和英大辞典』(1974 版)までも、用例はすべて **write to a person** 型を挙げているだけで、**write a person** 型がない。ところが、面白い、というよりも当り前なのであろうが、英米の英英辞典を参考にする英和辞典には、この用例が載っている。少々古くなった研究社の『新英和大辞典』(1957 版)の **write** の項目に **write a person** の用例は見当たらないが、比較的新しい辞書には **write (to) a person** とあり、研究社の『新英和中辞典』(1971 版)や旺文社の『英和中辞典』(1976 版)では「**write a person** 型は米語に多く、英国では **write to a person** 型とすることが多い」<sup>14</sup> と、注までついている。このような注は、アメリカでは、**write a person** 型が専ら使われるという印象を与える意味で **misleading** ではあるが、少なくとも、この用法を不当に無視するよりは遙かによい。

確かに、筆者の調査でも、イギリスでは **to** を伴う型が好まれるようであるが、アメリカでは、**write a person** は **write to a person** と全く同程度に一般に容認されている用法である。筆者が現在聴講している University of California, Los Angeles の言語学科と TESL の大学院の **native speakers** 約 30 人に聞いたところ、一人残らず、この二つの用法は正用法であると言っており、どちらの表現を好むかという問いに対して一様にとまどいを示していた。中には、無意識に交換して使用するという学生もいるほどである。

これまでに筆者が新聞・雑誌・小説<sup>5</sup> などから折にふれて集めた直接目的語 (**a letter**) を省いた **write** の用例が現在 72 例あるが、その大ざっぱな内訳はつぎの通りである。

17) A)	<b>write to a person</b> 型	27例
B)	<b>write a person</b> 型	19例
C)	同一人物が同じ手紙の中で A), B) 型を区別せずに交換して使用した例	3例
D)	直接・間接目的語ともに省略された例	
	i) <b>write</b> 型	7例

- |   |    |
|---|----|
| ii) write back 型                        | 7例 |
| E) 他の動詞と and によって接続された例                 |    |
| i) write and tell you that S            | 6例 |
| ii) write you back and tell you that S  | 2例 |
| iii) write to her and assure her that S | 1例 |

もちろん、上の数字がこの用例に関して決定的な意味を持っているなどと言うつもりはないが、少なくとも、アメリカ英語では *write a person* が正当な生存権を要求するだけの資格を持っていることだけは示していると思う。

17 A, B, C) に関しては、これ以上何も言うことはないが、17 D, E) については、*write to a person* はやがて *write a person* に吸収されるだろう、という筆者の予測と関係があるので、少しく用例をあげながら注を加えることにする。まず、17D) について言えば、手紙を書くという行為は、本来、一人称と二人称とにかかわり合う行為である。従って、手紙を受け取る者が一人称か二人称の場合、別に明示しなくても文脈によって間接目的語が何であるか理解される故に省略され得る、と考えられる。事実、筆者の持っている用例のうち、間接目的語が省略された例は、つぎのように、

- 18) a Do *write* soon, my Xaviera.  
 b I've known quite a few girls in Reno, but I could never get them to *write*.  
 c Why I'm *writing*, besides telling you I loved your book, is to ask a favor.  
 d You will understand my reason for *writing*.  
 e If you need anything, you can call, *write* or simply come.

すべて一人称か二人称が省略された場合である。これは理の当然であって、仮りに三人称が省略され、これを復元する手がかりがない場合、言語活動の生命である *communicability* がなくなってしまうからである。また「返事を書く」場合も同様であって、第三者に返事を書く以外は、間接目的語が残っているのが、かえって珍しいくらいである。

- 19) a Please *write back* because I'm dying to hear from you.  
 b So *write back* if this ever gets to you.  
 c I hope you will *write back* just once?  
 d If you ever *write back* personally, I think I would flip out.  
 e I hope very much that you will *write back* because I'm very interested in you and your line of work.

17E) に関して注目すべきは, *write* が他の動詞 (主に *verbs of saying*) と *and* によって結ばれると, ここでもまた, 間接目的語が省かれる傾向が見られる<sup>16</sup> ということである。

- 20) a I just wanted to *write* and let you know how I feel about you.  
 b If you would *write* and give me some advice, I would be really grateful.  
 c If you would like me to meet you, just *write* back and tell me when and where.  
 d After reading your book, I wanted to *write* and lay it on you.  
 e He *wrote* and told her that he was going to visit her in Paris in summer.

しかし, 17Ei) の間接目的語の省略は 17D) のそれとは同じ性質のものではない。なるほど 20) の大部分は一人称か二人称が間接目的語に使われているために同様な議論ができそうに見えるが, 三人称の *her* が間接目的語に使用されている 20e) に注意してほしい。この事実と, つぎの文

- 21) He writes that he is coming up to Tokyo.

が手紙に言及している文と解釈される場合, 手紙を受け取るのは話者以外にあり得ないことを考えると, 上の間接目的語の脱落は, 18) の文のように *pragmatically* にこれを復元できるという理由で起ったのではないことは明らかである。また, 20) が,

- 22) a Come and see me.  
 b Go and get me something to drink.

と同じ派生構造を持っていると考えられないことは, *write* が何の副詞句も伴わず単独で使用された場合, 「手紙を書く」意味にならないし, 20e) と同じ意味を伝えるために

- 23) a He *wrote to her* and told her that he was going to visit her in Paris in summer.  
 b He *wrote her* and told her that he was going to visit her in Paris in summer.

が存在することからも明らかであろう<sup>18</sup>。

20e) と 23a, b) とが同義であるということはそれらがいわゆる *transformationally related* であることを示唆するものである。問題は, 20e) の基底

構造が 23a) であるか 23b) であるかである。これに答えるためにつぎの文を見てほしい。

24) a You can trust and depend on him.

b They made fun of and bullied the poor boy.

Trust, make fun of は目的語を伴わずに自立できない以上、上の文において、それぞれの動詞の目的語は him であり、the poor boy であるはずである。ということは、英語の文法の中に、動詞+前置詞、動詞+名詞+前置詞が統語的にも意味的にも一つの他動詞と同じ働きを持つ場合、他の他動詞と and によって結ばれることが認められていることを示すものである。従って、write to は、つぎに示すように、

25) He was often written to by people he did not know.

一つの他動詞と同じ働きをしているのだから、tell と and に連結されることを妨むものは何もないはずなのに、実際はつぎに見るように許されない。

26) a John  $\left\{ \begin{array}{l} \text{wrote} \\ * \text{wrote to} \end{array} \right\}$  and told me that he was planning to visit Japan.

b If you would  $\left\{ \begin{array}{l} \text{write} \\ * \text{write to} \end{array} \right\}$  and give me some advice, I would be very happy.

上の事実は 20e) の基底構造が 23b) であることを示していると言ってよいであろう。

Write a person が write to a person と異なった distribution を示すのは上の場合だけではない。手紙の内容を表わす不定詞句、that 節が続いている場合も前置詞 to を伴わないことは、つぎに示す通りである。

27) a He wrote  $\left\{ \begin{array}{l} \text{his mother} \\ * \text{to his mother} \end{array} \right\}$  to come up to New York.

b He writes  $\left\{ \begin{array}{l} \text{me} \\ * \text{to me} \end{array} \right\}$  that he is going to leave there.

しかし、上の文の非文法性を英語の文法の中に、不定詞及び that 節の前の名詞句は前置詞を伴ってはならない、というような制限を設けて説明しようとしても役に立たないことはつぎに示す通りである。

28) a Can't I prevail upon you to have another helping of pie?

b He explained to us that it would be necessary to carry the plan out by all means.

なぜこのような現象が起こるのか現在のところ筆者には分らない。しかし、筆者の予測にとって重要なことは、**write a person** 型はその現われる環境に制限がないのに対し、**write to a person** 型は、上述の如く、かなり厳しい制限があるということである。これを言語習得、ひいては使用の観点から述べると、言語を習得しつつある者、或いは使用者は、その使用範囲に制限のある型を選ぶよりは制限のない、一般的な形態を好むのではないかと言えなくもない。このような主張はあながち根拠のない議論とは思えないし、筆者が、後者が前者にやがて吸収される方向にあることを示す証拠がわずかながらあると言ったのも、まさにこの意味においてであった。

以上、英語の二重目的語構造において直接目的語の省略可能性は、語い上の意味的余剰性——その動詞の意味構造に直接目的語が包含されている——にかかっており、文脈による意味的余剰性がこの現象に関係がないのは英語の統語的特徴であることを明らかにした。さらに直接目的語省略という観点から眺めて特異な行動を示す **write** に関して、アメリカ語法の現状を報告し、**write to a person** はやがて **write a person** に吸収されると思える根拠を述べた。

(1977.5)

#### 注

1. **ask** や **envy** もつぎのように
  - a) **They asked me a question.**
  - b) **I envy you your good fortune.**

表層的には二重目的語構造を取るが、深層構造に **to** または **for** を取らないので、これもまた **Fillmore (1965)** に従って、今回の論考の対象としないことにする。ただ、両動詞とも、

- c) **I'll ask him later.**
- d) **I envy you.**

のように、直接目的語の省略を許すので後にまた触れることにする。なお、**ask** に関しては

- e)? **They asked a question of me.**

のように前置詞 **of** を伴う構文は、**P. Schachter (1977 年の講義)** によれば、現在では **hardly acceptable** であるという。そして、講義に出ていた **native speakers** も同意見であった。

2. しかし、これらの動詞が初めから **his sister** を直接目的語としている場合は、言うまでもなく話は別で、文法的に正しいし、当然、二重目的語構造でもない。本文の 9) の各文参照。

3. これらの動詞が A) 群に属すると思われる証拠はつぎの通り。

- (1) まず、前置詞 **to** を伴うこと。

- a) **I'll pay the rent to the manager tomorrow.**

- b) He taught English to small children.
- c) John told the story to Jane.

(2) このグループに属する他の動詞が、間接目的語の関係代名詞化及び **wh-question** の変形を拒否するが、これらの動詞も **teach** の場合は多少異なるが、また同様な統語的特徴を示す。

- \*d) The guy I paid the bill looked like an Italian.
- ?e) Who(m) did you pay the bill?
- f) The man I taught English in Japan is now president of a big company.
- ?g) Who(m) did you teach English?
- \*h) Jane, whom John told the story, was the very woman behind the scene.
- ?i) Who(m) did John tell the story?

4. 奇妙なことに、直接目的語が省略されると間接目的語も関係代名詞化、**wh-question** の変形を拒否しないようである。

- a) The manager I paid said that there was a mistake in the bill.
- b) Who(m) did you pay?

この事実は、変形規則の適用の順序という概念に疑問を投げかけることになるかも知れない。なぜなら、**Filmore (1965)** によれば、**wh-question** 変形は **dative movement** 変形よりも前に適用されることになっているからである。

5. 同様な議論が、**ask**, **envy** などについても可能である。すなわち、つぎの文

- a) I'll ask him.
- b) I envy you.

が可能な理由は、それぞれの動詞の意味構造の中に直接目的語 (**ask: a question**, **envy: envy**) が包含されているためと考えられる。

6. 従って、**read** も、いわゆる **unspecified object** を持っていると言えるわけである。

He reads (something) in bed for an hour before he goes to sleep.

7. 二重目的語構造を取る大部分の動詞は、間接目的語に **[+human]** (少なくとも **[+animate]**) という意味素性を要求することに注意 (**Emonds (1976, p. 80)**) つぎの例参照。

- a)\* John bought the hat a book.
- b)\* John told the tree a story.

8. **Write** についても同様なことが言えそうに見えるが、後にふれるように、手紙を書くという対人的な行為を表わす性質もあるために、その後に **[+human]** を表わす名詞句を伴うことができる。

John writes his mother once a month.

9. 筆者の仮説の強力な反証になると思われるのはつぎの例である。

I don't have to show you.

**Show** は直接目的語として取り得る名詞句の性質にほとんど何の制限もないと思われるからである。現在のところ、この事実をどう説明してよいか分らない。

10. ここで言う文脈とは代名詞・助動詞などに見られる **anaphora** 現象のような言語的文脈だけでなく、直接指示のような物理的な文脈をも含めて言うことにする。

11. 文脈上の意味余剰性によって直接目的語が省略されたと思われる唯一の場合は、薬・化粧品などについての使用法・その他の掲示・指示に見られる表現である。

- a)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Push} \\ \text{Pull} \end{array} \right\}$  to open. (ドアの開閉)
- b) Return to Room 2. (本の返却)
- c) Use after cleansing to refresh and stimulate the skin. (化粧品)
- d) Do not use in the eye. (薬)

なおつぎのような “elliptical construction” も認められるが、省略されるのは直接目的語だけではないことに注意。

- e) To Tom. (To whom did you give the book?)
- f) On the table. (Where did you put your bag?)

12. しかし、英語と同じように case marker を持たず、語順が固定している言語の場合は同様な現象が見られても不思議はない。UCLA の TESL に所属しているポルトガルの native speaker によると、この言語も英語と全く同様な特徴を示すという。

13. この動詞の特異な点は、文脈によって手紙の相手が分る場合、それすら省かれるということである。

- a) Do you think he would be happy if I wrote back?
- b) His wife remains in London; so he writes at least once a month.

なお、本文の 18) の各文参照。

14. 旺文社編『英和中辞典』1976.

15. 筆者が資料の大部分を負っている *Letters to the Happy Hooker* は 1973年 8月に Waner Paperback Library 社から出た、ポルノ作家 Xaviera Hollander に対する一種の fan letters 集である。その書き手達は、高校生から弁護士・大学教授にまで及んでおり、性・年齢・出身地域・教養程度から言って、正にアメリカ社会の一つの縮図を構成していると言える。それだけにアメリカ人の write に関する用法をかなりよく反映していると思われる。

16. この傾向に対して少くとも二つの理由が考えられる。一つは短い動詞句が and によって結ばれると、同じ目的語の繰り返えしを避けたいという文体上の欲求である。もう一つは目的語を残しておく、場合によっては、構造上のあいまい性を引き起こし、誤解が生じるかも知れないという不安である。例えば、

- a) John raped the girl and murdered her.

には少くとも二つの解釈が可能である。一つは、

- b) John's raping the girl and his murdering her took place at different times.

であり、もう一つは、

- c) John's raping the girl and his murdering her took place almost simultaneously.

これに対して、

- d) John raped and murdered the girl.

は普通 c) の意味に解釈されるからである。

17. a) John writes.

は何の文脈もない場合 (例えば、ある passage の冒頭に使われたような場合) は、He is a writer. の意味に解釈される。手紙を書くことを伝えるためには、文脈上の手がかりがない場合、少くとも方向・目標 (goal) を表わす句がなければならない。

John writes home very often.

18. 20e) は、また、

- a) He wrote to tell her that he was going to visit her in Paris in

summer.

と paraphrase の関係にあり、つぎの文

b) The racoon washed the acon and ate it.

を同様に paraphrase の関係にある不定詞構造で言い換えるときは、つぎのように

c) The racoon washed the acon to eat it.

d)\* The racoon washed to eat the acon.

目的語が必須になることを考えると、23b) が 20e) の基底構造であるという主張はそれほど強い根拠に支えられているとは言えないかも知れない。しかし、この事実は 20e) が 22) と同じ派生構造を持っているということを示すだけであって、20e) のような構造を取るときは write to a person 型がより好まれるということにはならない。

### 参 考 文 献

- Antilla, Raimo (1972) *An Introduction to Historical and Comparative Linguistics*.
- Comrie, Bernard (forthcoming) 'Definiteness and Animacy: a Natural Class?'
- Emonds, Joseph E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press.
- Fillmore, Charles (1965) *Indirect Object Constructions in English and the Ordering of Transformations*. Mouton.
- Li, Charles N. (1976) (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press.
- Rhodes, Richard (1977) 'Semantics in a Relational Grammar' Paper Presented at the 13th Regional Meeting of CLS, the University of Chicago.
- Timberlake, Alan (1976) 'Reanalysis and Actualization in Syntactic Change' Unpublished Paper.

(Seijo University)